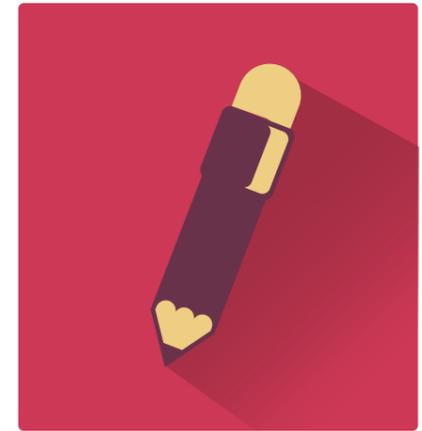




STUDY GUIDE



弘前大学スタディガイド

刊行：2026年 3月

発行：弘前大学 教育推進機構



弘前大学

主体的・能動的学修力を育む

弘前大学の新しい教養教育において、学生の皆さんは最初にスタディスキル導入科目として基礎ゼミナール(1年次前期)と地域学ゼミナール(1年次後期)を履修することになります。2つのスタディスキル導入科目では《自ら学んでいく力》、すなわち《主体的・能動的学修力》を養います。



基礎ゼミの最大の目的は、学生の主体的・能動的な学修の能力を形成することです。主体的・能動的学修とは、自ら課題を設定し、その課題に対して自分自身、そして社会や学会が納得できるような答えを模索していくことです。このため、情報を検索・収集し、収集した情報を整理・分析し、問題を発見し、自分の考えを他人に文章や言葉で伝達する一連の課題探究過程を実践します。そして学修の過程や結果を学修記録簿を作成して、学修を自ら管理していく習慣を確立していけば、徐々に主体的・能動的学修の力が育まれていきます。

地域学ゼミは、基礎ゼミで培った主体的・能動的学修力を活用する「問題解決学習(problem based learning)」という方式に則って進められます。地域学ゼミでは、現実の地域社会が抱える様々な問題を取り上げて、学生が自ら解決策を探求します。こうした活動の中で主体的・能動的学修力を更に研鑽することが狙いです。問題設定のためのアイデアを出していく時には、ブレインストーミング(特定のテーマについて様々なアイデアを協働的に創出していく手法)が有効ですし、アイデアを構造化して問題を分析していく時にはKJ法(多様なアイデアをカテゴリー分けして思考を構造化していく手法)が有効です。

もしできれば、問題設定や解決手法を考察するときには、他の講義や演習で学んだ知識や技能を積極的に活用してみたいと思います。学問知を活用して深い問題意識や斬新な解決手法を提示し、教員を驚かせましょう。

学生が望むのであれば、大学における学びは、授業の枠を越えてどこまでも広がっていきます。教養教育では、人類の幅広い英知を知ることができます。専門教育では、最先端の知に触れ、それを体得する機会を得るでしょう。ただし、こうした学びのチャンスも、学生に学ぶ意欲と能力があってこそそのものです。スタディスキル導入科目は、学びの意欲と能力の根幹である主体的・能動的学修力を育む場です。スタディスキル導入科目で、しっかりと主体的・能動的学修の基礎を確立し、教養教育・専門教育を有意義な学びの場としてください。



基礎ゼミの到達目標

- ① 主体的・能動的学修の態度を獲得すること
- ② 資料(情報)の検索・収集・整理に関する基本的技能を習得し、初歩的な研究倫理観を育むこと
- ③ 問題発見能力を高めること
- ④ 基本的な文章構成力・発表能力・討論能力などを獲得すること
- ⑤ 学生と担当教員および学生相互におけるコミュニケーションをとれること
- ⑥ 安全で健康的な学生生活を送ることができること

地域学ゼミの到達目標

- ① 学部横断チームの一員として自分の役割を認識し行動できること
- ② 学部横断チームの一員として他者の役割を判断し適切に働きかけることができること
- ③ 地域の問題に関する資料(情報)の検索・収集・整理・分析ができること
- ④ 発表会で適切な行動ができること
- ⑤ 地域が有している課題を発見できること
- ⑥ 地域の状況をデータに基づいて適切に把握し、それらの可視化や比較分析ができること
- ⑦ 地域が有している課題に対し、エビデンスに基づいた解決策を提案できること

学修・研究の倫理

弘前大学の学生の皆さんは、これからの大学生活で幅広い教養や高度な専門知を学修していくこととなります。そして、大学生活の最後に取り組む卒業研究では、それまでの学修に基づいて、新しい知識や技術の創造に取り組みます。

研究を進める上で、研究者には《研究倫理》が課されることとなります。研究倫理とは、人として、してはいけないことを正しく認識して研究を展開することです。研究倫理を難しく考える必要はありません。



例えば、実験や調査などを行って望ましくない結果が得られたとき、自分の都合で実験や調査の結果を変えてしまったりはいけません。実験ノートでは、観察したことを主観が入りこまないように正確に記載しなければいけません。実験ノートは研究者が発見したという事実、またそれに伴う知的財産権を保護する目的もあります。ウソを事実のように説明することも、もってのほかです。

実験を安全に行うために最大限の努力を払うことも研究倫理の一つです。実験を行った後、薬品等を廃棄する時、環境を破壊しないよう最大限の努力を払う必要もあります。社会調査を行うときには、調査対象者の人間としての尊厳や社会経済的な利益を尊重しなければなりません。

また、研究というものは、自身の資金のみではなく、多くの場合、公的機関などから資金援助をしてもらいます。この時、資金獲得を優先するあまり、他の研究者の発見などを矮小化して説明することも研究倫理に反することになります。

学生の皆さんには、自らの学修が研究につながっていくこと、そして研究が社会に対する責任をおった専門職的な実践であることを心に刻んで、学修および研究に取り組んで頂きたいと思います。



学修段階と研究の倫理

1年生 教養教育	レポートの書き方(剽窃の禁止、無断引用の禁止、出典の明記、コピー&ペーストの禁止 など)
2~3年生 専門教育	実験や調査方法(実験ノートの書き方、データの選別・改竄・捏造の禁止、再現性、法規・法令の遵守、安全事項の遵守 など)
4年生 卒業研究・卒業論文	研究方法(個人情報保護の保護、インフォームドコンセント、生データ提示、記録媒体の作成・保管、試料・試薬サンプルの保存 など)
大学院生 研究活動	論文投稿(盗用の禁止・二重投稿・ギフトオーサーシップの禁止など) 助成金獲得(利益相反・不正禁止・守秘義務 など)